

## 熊本県立芦北高等学校 平成28年度学校評価表

## 1 学校教育目標

教育方針 「熊本の心」を基本理念とし、夢への架け橋教育プラン、県立学校における児童生徒教育指導の重点、人権教育取組、体育保健課取組、特別支援教育の方向を指針とし、本校の校訓「敬愛・勤勉・創造」の具現化に取組み、豊かな人間性と社会を生き抜く力を育て、活気に満ち溢れた学校創りを目指す。

教育目標 地域の信頼と期待に応える芦高教育の創造と実践

目指す生徒像 ・【人の心の痛みのわかる生徒】 ・【あいさつのできる生徒】 ・【夢に向かって努力する生徒】

挨拶や服装など基本的な生活習慣が身に付いており、当たり前のことを当たり前実践し、自分の意見や考えをしっかりと周囲に伝えることができ、何事にも果敢にチャレンジする芦高生。

キャッチフレーズ『Challenge for your Dream! 芦高で君の夢に果敢にチャレンジしよう!』

教師の目標 生徒一人ひとりを理解し、優しさや厳しさを持った深い愛情で見守るとともに、生徒・保護者・地域の思いを受け止め、目指す生徒像の実現に努力する。

「校務改革」で「教師力」「担任力」を磨き、可能性にチャレンジする生徒を育成。

## 2 本年度の重点目標

## (1) 基礎学力向上

ア 一人ひとりの生徒に応じた授業の工夫・改善と個別指導を徹底

イ 図書館の活用と読書指導の徹底による、読む力、表現する力の育成

ウ 学力向上のための学習支援の実践（スタディサプリ等の活用による学び直し）

エ 教師と生徒が一体となった授業（公開授業の実施、グループ学習等の導入）

オ 教育の情報化と校務のスリム化による指導時間の確保と徹底（PCやプロジェクタの活用、教材のICT化、HP掲載、プレゼンテーション活用）

## (2) 健全な心と身体を育む生徒指導

ア 生活指導を充実させ、基本的な生活習慣を確立することで、生徒の健康・安全教育の推進を図る。

イ 教育相談体制を充実させ、生徒の心のケアと安心して学校生活を送れる体制づくりに努める。

ウ 部活動を推進し、生徒の心と身体の鍛錬と活気溢れる学校生活を実現する。

エ 環境保全活動をととして自然を愛し、大切に心身の育成に努める。

## (3) 夢を拓けるチャレンジ

ア 地域の信頼に応える教育を充実させるとともに、グローバルな視点で物事をとらえ、社会の形成者としての資質を育み、様々な課題に果敢にチャレンジする生徒の育成に努める。

イ 専門教育をととして経営感覚を磨き、地方創生を意識した地域活性化に寄与する人材の育成を図る。

ウ キャリア教育の視点に立った系統的な体験学習を通して、進学・就職へ果敢にチャレンジする生徒の育成に努める。

エ 学校農業クラブ活動、部活動、ボランティア活動等に積極的に取組み、地域との連携強化を図り、地域の活性化と魅力ある学校づくりに努める。

オ 教師も資質向上のために絶えまぬ研鑽に努める。

## (4) キーワード

ア 『チャレンジは無数の可能性を引き出す』

人生に無駄はない。あるとすれば、それは何事にもチャレンジしないこと

イ 『命を大切に教育』

命を育て、食を育む農業教育、資源と環境を保全する林業教育、農村社会を支える福祉教育、三位一体となった芦高教育の実践

ウ 『保護者と地域が最高のサポーター』

生徒・保護者・教師そして地域が一体となって教育による人材育成を実践

エ 『郷土愛』

海や山や田畑の豊かな恵みへの感謝と郷土愛が自信と誇りへと繋がる教育

### 3 自己評価総括表

評価の項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	特色ある学校づくり	魅力ある学科づくりの推進	平成29年度の3学科の募集定員120名に対し、合計80名以上の入学生を確保する。	中学校や地域との連携を更に深め、芦北高校の魅力地域へ発信し、また、各科の特色を活かして生徒募集に繋げる。グローバル化へ向け、現1年生の修学旅行の内容を検討する。	A	体験入学や学校説明会に工夫を凝らし、前期選抜では93人の志望者を獲得できた。修学旅行では国内留学生との懇談会を旅程に加えることができた。
		部活動の活性化	部活動加入率90%以上を目標として部活動活性化に繋げる。	魅力ある部活動の運営を通して、生徒が意欲的に活動できる環境を作る。部活動顧問の専門性を活かした地域との連携を深める。町の支援事業を活用したレベルアップ事業において、スポーツ界等で活躍する優れた講師を招聘し、生徒の夢へのチャレンジを支援する。	B	部活動加入率は %であった。レベルアップ事業を活用し、芦高祭では巻誠一郎氏を講師として招聘、また体育系部活動全生徒を対象にロアッソ熊本から講師を招き、メンタルトレーニング講座を開催した。
	危機管理	不祥事防止の徹底	不祥事ゼロを目指すし、地域から信頼される学校づくりを目指す。	月に2回、芦北高校不祥事防止確認事項を朝会で読み上げ、不祥事防止意識を高める。定期考査や長期休業期間に職員研修を実施する。	B	月に2回、朝会で不祥事防止確認事項の読み上げを実施した。不祥事防止を含め、職員研修を毎月実施できたが、分野の再検討が必要。
学力向上	授業力向上のための取り組み	授業の充実	校外の各種研究授業や講習会に年1回以上参加して、指導力の向上や技術の習得に繋げる。専門教育におけるTT授業の活用。	各教科でアクティブ・ラーニングを重視した授業改善を行い、わかる授業に努める。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導力向上と技術の習得及び安全確保に配慮する。	B	校外では近隣中学校の公開授業や授業マイスターの研究授業等に積極的に参加した。校内研究授業では、ほとんどの教科でアクティブ・ラーニングを重視した授業展開ができた。
			公開授業週間を年2回、研究授業を各教科年1回、授業評価を年2回実施する。	公開授業・研究授業、生徒の授業評価を実施し、課題の分析による授業改善とICTを活用した授業を展開する。	C	公開授業週間では、昨年度より参加数が少なく、周知方法等に課題が残った。ICTの活用もあまり進んでいない。
	「確かな学力」の定着	自ら学ぶ学習の奨励	生徒一人あたり年間10冊以上の読書量の確保を目指す。毎月1回、漢字、計算テストを実施する。生徒一人あたり1時間以上の家庭学習量を確保する。	朝の10分間読書の充実を図る。月1回の漢字、計算テストの実施と事前学習に力を入れる。家庭学習時間確保のため課題を工夫する。長期休業期間中、課題を出し学習させる。町の支援事業で導入したスタディサプリを各クラス及び教科で活用する。	C	朝読書が定着して、落ち着いた雰囲気の中で1日がスタートしている。漢字、計算テストは学年が中心となり成果を上げ、基礎学力向上につながっている。長期休暇中の課題は生徒の自己学習につながりにくく、出題方法に工夫が必要である。スタディサプリは運用体制等に課題が残った。
キャリア教育(進路指導)	進路目標の早期確立	進路情報の収集と活用	生徒の進路選択の情報として、各学期2回以上進路行事を行い、校外のガイダンスや見学会に生徒が2回以上参加する。	細かな進路希望調査、生徒一人ひとりとの進路面談を通して、進路希望を具体的に把握し、実現へ向けた積極的な働きかけを行う。	B	卒業生講演会、進路講演会、企業見学を含め、その他多くの進路行事を実施することができた。学年を問わずオープンキャンパスや看護体験への参加も増えた。
		進路保障	2月末には、希望進路達成100%を目指す。全職員による面接指導の充実。	進路希望調査を基にした進路指導や企業求人開拓の実施、進学支援体制の確立や個別指導の充実を図る。	B	職員やキャリアサポーターの進路指導への協力もあり生徒の進路は順調に決定した。進学は国立大学に2名合格したものの、その指導体制は改善が必要。
	資格取得の奨励	年間実施計画の提示と推進	生徒一人ひとりが進路実現に繋がる資格取得に2つ以上挑戦できる環境づくりを目指す。	各学科や学年、クラス、教科の協力のもと、資格試験の周知や勧誘を行い、資格取得の学習支援体制を確立する。	B	各学科・クラスの協力もあり、昨年度並みの検定試験への取組があった。また、3年生の履歴書資格欄に特記事項なしと記載する生徒が今年度はゼロだった。

### 3 自己評価総括表

評価の項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
生徒指導	健全な心身の育成	基本的な生活習慣の確立とコミュニケーション能力の育成	「人の心の痛みがわかる生徒」の育成。遅刻者の減少と整容指導の徹底。挨拶の励行と責任ある行動。公共意識を向上させる。特別指導件数10件未満を目指す。	挨拶運動・登下校指導や学校生活全般において、思いやりの心と責任ある行動を意識づけさせる。月1回の全校集会・全職員による服装検査授業前の整容指導を実施する。	B	学校生活においては立ち止まり挨拶を交わす姿が見られた。朝学習の取組みにより登校時間が早くなり遅刻者が減少した。容姿や言動、生活マナーにおける規範意識は向上したが、若干意識の低い生徒が繰り返し指導を受けている。
	情操教育の推進	安全教育の理解と徹底	交通違反・交通事故0を目指す。校内だけでなく、校外での二輪車施錠率の向上を目指す。薬物乱用等に対する理解の徹底。良識ある携帯電話の使用と携帯電話のセキュリティ対策指導。	クラス指導の他に、講話・講習・講演会を実施し、話し合いの場を設ける。交通委員による二輪車の施錠呼びかけ。関係機関と連携した情報安全教育の講演会を実施するとともに、携帯電話の使い方など研修内容の工夫に努める。	B	バイク通学生による実技講習会を実施したが、年度末に大きな交通事故が発生した。携帯電話が絡む問題行動が増加傾向にあり、学年集会や長期休業前に全体指導を行った。自転車二重ロックを学年対抗戦に加点したことで、ほぼ100%の施錠率を達成できた。
人権教育の推進	推進体制の確立と研修の充実	教職員の実践的指導力の向上	全職員が校外研修会へ1回以上参加し、意識向上と指導力向上を図る。	職員への研修案内と参加呼びかけを定期的に行い、全職員校外研修に参加する。LHR等での指導力向上に向けた事前研修の充実を図る。	C	職員への声かけが遅れたことや開催予定の集会等が中止になったことが影響し、1回以上の参加が望めなかった。
	すべての教育活動を通じた取組の強化	課題を抱えた生徒への支援と対策	各校務分掌と連携を図り、生徒の実態を把握し、いつ・どこでも・すぐに対応できる職員の体制作りを行う。	担任・学年会・教科会・特別支援教育・教育相談の各担当者との連携を図り、研修をとおして全職員の共通理解を深め実践力を強化する。	B	推進会議で、各学年の現状報告を行い、生徒達の状況を把握できた。また、課題を抱えた生徒の状況を共有することで、共通した支援体制をとることができた。
	命を大切に育む指導の充実	命の大切さを実感させる教育の推進	命を大切にし、自尊感情を高め、お互いを理解し合い、認め合う心を育てる。	全校集会やサマースクールなどで命に関する全体講話を実施する。教育活動全体を通して全職員が自分の言葉で語り、生徒と共に互いの信頼を築く土台作りをする。	A	小規模校の特性を活かし、担任をはじめとする多くの職員が子ども達と向き合うことができる。全校集会や人権の行事等、担任や職員の思いを伝える機会は確保されている。
いじめの防止等	いじめ根絶の啓発・推進	いじめを絶対に許さない学校づくり	人の痛みがわかる生徒の育成。いじめに関する問題行動の根絶を目指す。全クラスで生徒面談を学期1回以上行い、情報収集と共有に努める。	いじめ防止に関する講話を実施して、生命や人権を大切にすることを育む。「目指す生徒像」「いじめを許さない宣言文」を教室に掲示し、啓発に努める。	B	サマースクールや人権集会で「いじめを許さない宣言文」を全校生徒とともに唱和し、人権意識を高めることができた。生徒間に陰口を注意しあう様子が見られてきた。
	いじめの防止と早期発見	いじめ防止や早期発見・早期対応	心のアンケートを年3回実施して、いじめ問題の実態を把握し、対策を早急に取り組む。いじめの把握においては、関係機関と連携を密に取りあい早期対応に取り組む。	心のアンケート結果を基に、実態把握に努める。(年3回のアンケート実施)いじめ防止等対策委員会を3回実施し、外部識者から指導・助言を仰ぎ、取組についての検証を行う。	B	心のアンケートの結果を基にいじめの認知を行うことができた。外部識者の指導助言を受け、生徒への早急な対応もできてきた。
教育相談	特別支援教育	支援対象生徒について早期の支援開始	保護者、中学校、職員から得た情報を迅速に集約する。生徒理解の職員研修等を学期に2回行い、全職員の共通理解を図る。保護者の理解を得て、支援を開始する。	「保護者の気づき」「中学校訪問記録」で新入生の実態を4月中旬までに把握する。「気づきメモ」週間を5月中に実施する。教科担当者会を行い、それを受けての生徒理解研修を6月中に実施する。	B	「保護者の気づき」「中学校訪問記録」を元に4月中に生徒理解研修を行い、職員の共通理解を図った。教科担当者会議は毎学期ごとに1回行い情報を共有した。個別の教育指導計画の作成が2学期からとなり、前年度の引継ぎ等の課題が残った。

3 自己評価総括表						
評価の項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
		支援対象生徒の進路保障	支援対象生徒（3年生）の進路決定100%を目指す。1・2年生の進級を目標に、あらゆる場面で支援を行う。	担任、進路指導部、教育相談部、関係機関と連携を取り、保護者の理解を得て進めていく。	B	3年生については、学年、進路指導部が中心となって生徒への指導を行ったほか、就職先への事前連絡等を行い、生徒が困らないような手立てを行った。
	教育相談	生徒の実態把握と課題解決	欠席が続く生徒、その他精神面への支援が必要な生徒の課題解決を図る。職員が一人で抱え込まないための相談体制の充実を図る。	定期的に教育相談校内委員会を開催し情報交換を行う。スクールカウンセラーを活用し課題解決に向けた方策を検討する。必要に応じて医療機関や福祉事務所等と連携を図る。	B	定期的に教育相談委員会（1月末で15回）を開催し、情報交換を行った。発達障がい以外の生徒（長期欠席者等）に関しては、カウンセラーの協力により、中学時代の長欠者もかなり改善してきたが、一部の生徒については、共通理解を図っただけで、取り組みは各学年に任せる形となってしまった。

4 学校関係者評価
<p>(1) 町民体育祭のような町の行事に多くの生徒が参加してくれれば、芦北高校の存在感が町民にもっと広まる。町から支援を受けている以上は、町に対して協力する責任がある。もっと町の行事等にも積極的に参加し、芦北町による芦北高校総合支援事業に還元する姿勢を期待したい。</p> <p>(2) 中学生の多くが、芦北高校のイメージは「明るい」と答えている。体験入学で本校生が中学生に対して丁寧に教えてくれる姿が印象に残ったことがその要因である。これからも明るい姿や頑張る姿を地域の小中学生に見せてほしい。</p> <p>(3) 芦北高校がはっきりとした方向性を持って運営されていると感じている。</p> <p>(4) 入学者選抜の高倍率は、本校関係者の努力の成果である。2年次のインターンシップや修学旅行での学科別研修など、将来の進路選択に繋がる取組を今後も続けてほしい。</p> <p>(5) 早期退勤は良い取組なので継続してもらいたい。</p> <p>(6) 電車通学の生徒は、学年が上がるにつれて駅での会話も多くなる。地域でも保護者の苦情があまり聞こえてこないということは、学校として落ち着いているという証である。</p> <p>(7) 比較的おとなしい生徒が多い印象も受ける。もう少し元気に自己主張をしてもよいのではないか。</p>

5 総合評価
<p>(1) 夢へのチャレンジを掲げ、生徒が主体的に取り組む学習活動を実践し、家庭、地域との連携を深めながら「地域の信頼と期待に応える芦高教育の創造と実践」を展開することができた。</p> <p>(2) 生徒募集では、年度当初に設定した目標を上回ることができた。芦北町の支援事業と併せて、職員一人ひとりがそれぞれの立場でPR意識を持ち、生徒の姿を前面に出す広報活動が実を結んだ。</p> <p>(3) 部活動の活性化が学校の活性化に大きく貢献している。空手道、相撲、新体操が全国大会出場を果たし、サッカーは地域と連携した地元小中学生との合同トレーニング会を催す等、活動の工夫が見られた。</p> <p>(4) 学校農業クラブ活動では、本年度は県連事務局として本校生徒が熊本県の農業関係高校を取りまとめ、様々な場面で活躍した。特に学校農業クラブ連盟全国大会における農業鑑定競技（森林の部）では、本校生が最優秀賞と優秀賞を獲得することができ、本校通算20回目の日本一を獲得できた。</p> <p>(5) 職員の授業力向上に向け、協働・協調的な学びやICT機器の活用を取り入れる授業改善をすすめ、研究授業においても職員の相互評価に協働・強調的な要素を取り入れた。次期学習指導要領について研修を深め、さらなる授業改善を進めていく必要がある。</p> <p>(6) 進路指導では、生徒全員が進路を決定することができた。国立大学に2人合格したが、公務員では今後の課題もみられた。</p> <p>(7) 人権教育では、「人の心の痛みがわかる生徒の育成」を目指し、人権尊重の精神を高める多くの取組を行った。また、心のアンケートや面談により生徒の把握に努め、職員間で生徒指導の共通理解を図るよう努めた。いじめや生徒間のトラブルには、早急に対応し、事案の早期解決を図ることができた。</p> <p>(8) 防災対応では、熊本地震の発生を受け、危機管理マニュアルの見直しを行い、避難訓練もより実践的な想定で行った。県教委主催の高校生ボランティアに参加した生徒の全校集会での報告や、生徒会やボランティア部が中心となって全校生徒へ呼びかけ、被災地にある小学校へ花の寄植えやメッセージカードを寄贈する活動等を通じて、本校の目指す生徒</p>

像の一つである「人の心の痛みの分かる生徒」の育成に繋げることができた。

(9) 特別支援教育では、多様化した生徒が増える中、個別の支援計画の作成に大きな成果がみられた。スクールカウンセラーとの教育相談でも多くの成果をあげる事ができた。

#### 6 次年度への課題・改善方策

- (1) 芦北町の支援事業を受け、生徒のレベルアップと町への還元をテーマに、生徒のチャレンジ精神を刺激する魅力的な取組を進める。
- (2) 進路指導では、地域の後継者育成を目指す一方で、国立大学への進学指導にも力を入れ、地域の中学生の進学ニーズにもしっかりと対応していく。
- (3) 学校改革の取組を積極的に進め、職員の負担感軽減と業務の効率化に繋がる取組を進めて行く。
- (4) 本校の魅力発信を広げる広報活動に全職員で取り組み、地域との連携を深めた学校教育を推進し、生徒募集に繋げる。
- (5) 教科指導では、生徒の知的好奇心を刺激し、主体的な学びを引き出す授業づくりを目指す。また、生徒の授業評価を職員の自己評価に反映させ、指導力向上への工夫改善に取り組む。
- (6) 専門教育では、各学科間の連携や協働を深め、生徒や地域のニーズを的確に受け止めながら地域と連携した教育活動をさらに展開する。
- (7) 芦北支援学校高等部佐敷分教室との交流及び共同学習は、各学科の学習活動や生徒会活動、職員研修等における連携を更に深め、充実を図る。